

Title	Fritz Wiegner, Diluviale Vorgeschichte des Menschen, 1928
Sub Title	
Author	大山, 柏(Oyama, Kashiwa)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.2 (1928. 7) ,p.155(309)- 156(310)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19280700-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

代の編年を研究し、特に力を洪積層の研究に注いで居る。第二編は *Entwurf einer historische Geologie des Eiszeitalters* 「氷河時代に對する地史學上の一輪廓」と題し第五章以下第八章までの四章に區分し、緒言より、古期洪積時代即ち古期氷河時代、中期洪積時代即ち氷間期、新期洪積時代即ち新期洪積氷河時代の各章に夫々内容を區分して研究して居る。而して特に巻頭の第一第二編緒言に於て、第三編に於て、化石人類と其文化を研究する事を豫告してある。それ故この第一第二編は前論とも云ふべきで、當時の人類や文化などには直接觸れて居らない。殆んど全部が廣義の地史學的研究であり、内容は地質學上の層位學、氷河學や洪積動植物學であつて、漸く引合ひに化石人類や其文化が出てくるのみで、氣早に本書を見ると、之が史前學の書かと疑はれもしよう。

然しこれには大なる理由がある。元來バイヤー氏は、氷河時代に對し、ドイツのヘンク其他のアルプス四氷河説に對し、根本から反對で、三氷河説の持主であり、多年これに關する論争を續けて居る人である以上、洪積人類を説く以前に、先づ以て基礎をなす氷期編年を自説の如く確立しなければならぬ。其研究が本書なのである。それ故、殆んど單なる洪積時代研究書と思はるゝ程、これに力を入れて居るのも、氏自身に取つては尤のことである。この三氷河説に對する根柢に於て、立脚點は認めらるゝがさりとて今日無條件でこれを容れることは出来ない。アルプス氷河が奥國方面では三回、獨佛伊方面では四回の進退があつたが、全般に三回づゝか、四回づゝか、尙々研究の餘地が充分にある。

この全般統一した研究が完成しない以上は、局地研究のみからの立論(バイヤー氏は必ずしも局地研究のみではないが)は、保留せらる可く安全である。然し本研究により、特に小局地の多數例に於て得る所多く、特に動物群、植物群の研究では、從來比較的閑却せられて居つた方面にも、相應に研究せられて居る點に於て、一特色を發揮して居る。それ故本書は初めて、歐洲舊石器時代を研究せんとする方々には、御勧めしないが、既に研究緒についた方々には良參考書である。特に本書の如く自然科學に基礎を發して、進む可きが、今日の研究であることを附言して置く。

(昭和三、六、一三、大山柏)

Fritz Wieger, *Diluviale Vorgeschichte des Menschen*. 1928.

バイヤーの書評を試みた數日後にこの新刊に接した故、これもついでに紹介することとする。

著者は伯林地質調査所の教授、ドイツに於ける舊石器時代研究家として、錚々たる一人で、從來からの研究は相應にある。

特に著者の近著として有名なのは *Diluvialprähistorie als geologische Wissenschaft*. 1920 即ち「地質學としての洪積史前學」の表題のもとに、舊石器時代研究の根柢を地質學上に置き、特に層位學的研究と共存生物とよりして、舊石編年に及ぼしたもので、より顯著に自然科學を基礎とした點に於て、この著の價值を認められて居る。然るに今回、表題の如く『洪積史前の人類』を出版

せられたが、この内容の主要部が、前者と同様である點に於て、一見して甚だ失望したのである。勿論未だ精讀しては居らない。又前者と同様でも、随分増補訂正せられた點が少なくないが、著者が著者である以上、元本に接する以前に、餘りに多く期待した故でもある。

元來著者の舊石器時代編年は、他の一般、特に佛のブロイ、スヘインのチーバーマイヤー、米國のナスボンなどの舊石器時代と氷河關係を第三氷間期以降に見て行かうとする議論に對し、甚しく古く見て居る點が、有名なのであつて、多くの書物にウキーガの編年として例出せられて居る所は、多くを見らるれば直に了解せらるゝ所である。従つてウキーガーは舊石器時代を一般の如く前後期に二分しないで、前中後期に三分して居るのである。本書に於ても、この根柢は動かさず、「プレ、シエンアン」を以て第一氷間期の始めとなし、各編年期と氷期關係は七年前の前者と變つて居らない。前者から見ると層位的研究も随分多く、増加せられて居るが、それでも意見に變化の無い所が、他と益々離れてくる。この點から見ると、バイヤーの三氷期説とは、全く違つて、この書も、一般説ではない。然し地質學者であり、この見地から見て居る所が強いが、其層位學研究に對し、私は全部承認し難き所がある。特に佛國アペール附近の層位に關しては、この著者に對するのみではないが、大なる疑問がある。これに關しては述ぶる可く、こと餘りに多いから他日に譲るが、研究の餘地多いことだけを注意して置く。(私の舊石器時代に關した概論は、折

が、原稿送了したに拘はらず、無斷で中折終了せられてしまつた故、このウキーガーに對する一部私の考も、未發表となつた。外に前者に對しては、私は簡單に、拙稿、石器時代に關する歐米の文献、其二、人類學雜誌、第四一の七に紹介はして居る)

兎に角、右様の次第であるから、本書もバイヤーと同様初學者諸君の讀物ではない。然し各種議論、特に今日論争の盛んなるとき、一方の雄として、其説の是非は、本書を見ればなるまい。ただ本書には、表題に對してか、共働者として、Hans Weinerの Die fossilen Menschenreste を第二編として加へてあるが、蛇足の様に思はるゝ。それ故前者を見た方には、強て必要とも思はれないが、新に見るなれば、本書の方が、増補せられて居るだけ、よいわけである。特に巻尾の参考文献は其數五百二十五に達して居る點に於て、舊石器時代に關する一通りの文献は揃うて居る。(昭和三、六、二一、大山柏)

寄贈交換圖書雜誌目錄

綜合日本史概説下	栗田元次氏著	中	文	館
日蓮聖人傳十講	山川智應氏著	山	川	智
上代譯制の研究	坂本太郎氏著	至	文	堂
近世日本演劇の源流	原田亨一氏著	同	文	堂
皇集第一(金雜文叢第三)		金	雜	學
		院		